
IS <インフィニット・ストラトス> ~ School Servant ~

ヤマダナドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> School Serv
ant

【Nコード】

N92930

【作者名】

ヤマダナドウ

【あらすじ】

世界で唯一の男のIS<インフィニット・ストラトス>の搭乗者、織斑一夏。女性にのみ反応するその兵器の操縦者を育成する学園は彼以外はもちろん女子生徒のみ。そんな環境で唯一の男のIS搭乗者を守るために現れたのは一人の校務員だった！？女性が優遇される社会で女の子だけ（男もいるよ！）の学園の中で教師一年目（用務員だよ！）の彼は胃に穴を開けることなくことなく過ごせるのか！？生徒会長（強いよ！）にいじられても、義理の姉（もっと強い

よ！(にプレッシャーをかけられても負けません！！バトルあり、
恋愛あり、コメディありのお話。ふざけてばかりじゃないですよ！

前書き

初めまして。ヤマダナドウというものです。二次創作というか、小説を書くことが初めてなのでいたらないところもありますが楽しんでもらえたら嬉しいです。ISを読んだことのない人にも楽しんでもらえるような小説にしたいと思っています。

主にに携帯から投稿しているので、見づらくなってしまつところがあつたり、誤字・脱字がないように最大の注意をはらっていますが、もしあつたらご一報おねがいます。

感想、激励、注意、苦情、バリゾーゴンお待ちしております。

第一話：本当はドキドキ キャンパスライフを送ってるはずだったんです

「全員そろってますねー。それじゃあショート・ホーム・ルームSHRはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよっとつろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

(これは……………想像以上にきつい……………)

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。

なんで真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目をあびるじゃないか。

六年ぶりに再会した幼なじみの篠ノ之箒は窓側の席だというのに、目を逸らしやがった。……………もしかして俺嫌われているんじゃないか？

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。

あー、笑われてる。俺はその声を聞いてますます落ち着かなくなる。

ともかく、クラスで男は俺だけ。他の生徒二十九名が女子。副担任も女性。担任は……………知らないけど、女性らしい。らしいというのは未だに顔を出さないからだ。何してるんだろっね。

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる?」

怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

山田先生が詰め寄ってきたせいかはわからないが、またすごい注目を浴びてしまう。

しかし、最初に溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た俺はしっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ……………)

今まで背中に感じていただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。

さすがにこんな風に注視されると、いくら女子に苦手意識のない俺だってたじろく。

「えー……………えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

他になにか言うことがないか考えていたら、思わずさっき行われた着任式での光景を思い出した。

きつと兄貴もこんな気持ちだったんだろうと思つと同情せずには
いられなかった。

「以上をもちまして本年度、入学式の全行程を終了とさせていただきます」

壇上で宣言する男性こと轡木十蔵学園長は壇上から俺のほうに視線を向けた。

「それでは引き続き着任式を始めさせていただきます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

入学式の会場は新入生 + (俺だ) の緊張感に包まれていて、静
まり返っている。

「では新任の先生を向かって右から順に紹介します。」

堂々とした主任らしき教師の紹介にせめてお辞儀くらい反応を
しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕は
ない。

なぜか。

簡単だ。

俺は高校生でも教師でもないからだ。

今俺は高校の入学式の会場にいる。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題は俺がここにいるはずのない人間という点だ。

(これは……想像以上にきつい……)

自意識過剰ではなく、本当に女子生徒ほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、バランスが悪い。

なんで新任女性教師の中に男一人なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目をあびるじゃないか。

気を紛らわすために女子生徒たちを見回してみると、ちらほらと見知った顔を見つける。

その中に六年ぶりの再会となる弟分たちがいた。あ、一夏のやつ目を逸らしやがった。

……まあ、散々引つ張り回したからなあ。

「……くん。柳哲也くんっ!」

「は、はいつ!?!」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。

あー、笑われてる。俺はその声を聞いてますます落ち着かなくな

る。本来ならば俺は大学の入学式に参加しているはずだ。なのに何してるんだろっね。

「大きな声を出してしまい申し訳ないですが、私の紹介も終わっていて、順に自己紹介をしてもらっていたところです。自己紹介、お願いします」

「あ……………！ は、はい！」

何事も第一印象が大事だというのに失敗してしまうとは。名誉挽回するつもりで挨拶をしようと顔を上げ、背筋を伸ばす。

(うつ……………)

今まで他の教師に向いていた視線が一気に俺に向けられたのを感じず。さすがにこんな風に注視されると、いくら女子に苦手意識のない俺だつてたじろいしてしまう。

「本日よりこの学園に用務員として着任した、柳哲也です。よろしくお願いします！」

第二話：ここに来るきっかけは後で詳しく

やっぱり大勢の人の前で話すのって緊張するよねっ!!

あのあと自己紹介をなんとか無事に済ませた俺は、これから職場となる用務員室にいた。

「これからよろしくお願いしますね。柳君」

・・・・・・・・・・学園長と一緒に。

「何故轡木さんがここにいらっしやるんですか？」

「おや？ 言ってなかったでしょうか。普段、私は用務員の一部の業務を行っているんですよ」

「えっ、学園長なのに!?!じゃあこの部屋と一緒にすごすんですか・・・・・・・・・・?」

「ああ、そこは安心してください。普段は学園長室の方にいますからね」

「はぁ・・・・・・・・・・」

今日からここに住む身としてはそのほうが断然安心できた。上司

(学園のトップだし)と一緒に暮らすなんてことになっていたら、胃に穴が何個も空いて一か月で辞職しなければならなくなる。

「しかし、この話を受けてくれるとは思っていませんでした」

「轡木さん、それは今更すぎませんか？」

「柳君が説得に応じるとは思ってもいませんでしたから」

「あの人にあんなこと言われたら逆らえませんよ」

俺がこうして大学への入学をやめてまで用務員になったことにはもちろんそれだけの理由がある。

まあ恐怖に逆らえなかったということも理由の一つなんだが。素手でIS用の装備を振り回す相手に頼まれたら断る気なんて起きるわけがない。

「ところで、柳君にはこれから用務員だけではなく新入生の副担任としても業務をこなしてもらいますが、準備は万全ですか？」

「まあこの学園の生徒よりはISについての知識を持っているので、あまり心配はしていません」

「さすがは篠ノ之博士の一番弟子ですね」

「一番弟子というより、ただの雑用係なんですけどね」

「頼りにしてますよ柳君。では私はこの辺で戻るとしましょうか。なにかあれば私の部屋まで来て下さい。それでは、また」

「はい、ありがとうございます」

轡木さんが去った後、入学式の後片付けをしたり、授業の準備をやっていると、あっ！という間に担当する授業の時間になった。た。

後片付けとか、書類の整理なんかしていたら、なんだかあのマッドサイエンティストのところで雑用をしていたときのことを思い出してしまった。あいつは今ごろ何をしているのだろうか……。まあ、俺の前にあの宇宙人みたいな女が現れなければ平和に過ごせるので、これから先は無関係でいられたらいいんだけど。

しかしIS学園で仕事をするからにはあの女とは直接、間接を問わず、なんらかの形で関わらなければいけないだろう。顔を見たくないどころか、名前を聞くだけで鳥肌が立つ相手とはいえ、あいつのおかげで普通の生活が送れることができるし、この学園で役に立つ知識と実力が与えられたのだから今は感謝しておこう。……不本意だけど。

マッドのことは頭の中から消去して、授業の準備を終わらせて用務員室を出ることにした。

と、その前に机の上に置かれた書類に確認もかねて目を通しておく。そこには俺がこれからこなさなければならぬ仕事の内容が載っている。

俺の仕事は、正確にはさつき轡木さんが言っていた後進の教育と、用務員としての学園の整備だけではない。

俺が大学への進学をやめて、さらには頼りたくもない篠ノ之束に頼ることになるうとも、この学園に来た最大の理由。そして最も優

先される仕事の内容。

それは『世界で唯一の男性IS搭乗者、織斑一夏の安全の確保、および危害をもたらす敵性の排除』だ。

第三話：ウルトラ生徒会長と下っ端校務員

轡木さんのお話を終え、新任教師（用務員か）としての初仕事をこなすために人気の無い廊下を進んでいたときのことだった。

ポンポン

ふにっ

な、なんだ！？いきなり肩を叩かれたので、反射的に振り返ったら、ほっぺに指がつきささってるんだけど！？

何事かと思い、視線を指を突き立てている犯人へと移す。

とてつもなく美人の生徒会長がそこにいた。

「……にゃんふぁ、たふえなしか」

そこにいたのは頭脳明晰、容姿端麗、スタイルもよくてさらにはお嬢さまという三拍子どころか四拍子、五拍子もそろった少女。I S 学園生徒会長。十七代目楯無。こと、更識楯無だった。

そんなウルトラ生徒会長に振り返りざまにツンツンされるといって決して動揺なんてしないのである。

考えたらこの学園で俺にこんなことするのもこいつぐらいだし。

このウルトラ生徒会長と初めて会ったのは約二年前か。まだあの時は楯無がI S 学園に入る前だったなあ。それ以来お互いにからかったり、からかわれたりしているもんだからすっかり慣れてしまっ

た。

……ウルトラ生徒会長つて腕からビームとかだしそつだなあ。サラシウム光線っ！！みたいな。

まあ、楯無なら本当に出しかねないが。

「またくだらないこと考えてましたね？」

グリグリ

「またとはなんふあ！またとふあ！」

「そんなことより、なんだとはあんまりじゃありませんか？」

グリグリ

「新任の教師捕まえてからかう生徒にはふおれでじゅうふんだろ」

「柳先生たら酷い……学園に来たばかりで不安だろうと思って、少しでも気を紛らわせてさしあげようと思ったのに！」

グリグリ

「ええい！！いいかげんグリグリするのをやめろ！！」

楯無が指をグリグリするたびに外ハネのくせっ毛がピョコピョコと動物みたいに動いてちよっとおもしろかった。

新任教師をいじりに来た生徒会長がやっ指を離す。

ほっぺに指の痕ができていないか。え、俺この顔で初めて

教壇に立つの？それ、どんな罰ゲームなの？

「つと、ちゃんとした挨拶がまだでしたね。お久しぶりです。柳先生」

「前に学園に来たのは二ヶ月前か？久しぶりってほどでもないだろ。ちよくちよく連絡もとってたし」

「まあ、そうですね」

「あと、柳先生じゃなくていつも通り名前でいいから」

「ふふっ。哲也さんらしい」

知り合ってから二年たつ相手から急に敬称付きで呼ばれたら焦るよね。

なんかこれから怒られるみたいで。

「哲也さんはさっそく用務員のお仕事ですか？スーツ姿で？」

「俺はそこまでポケチャいないぞ……これから一年生ところで講義するんだよ。装備の特性について」

「織斑先生じゃなくて哲也さんですか……うーん、適役かも。ちなみにどのクラスですか？」

「かんざし簪のところじゃないぞ。一組だから」

「一組っていうと、あの一組ですか？」

『あの』というのはいつの事だろう。

「そう。唯一の男のES搭乗者。織斑一夏のいる一年一組」

なんか『1』がたくさん出てきた。これで名簿が一番なら完璧なのになあ。じつに惜しい男が一夏。

「篠ノ之博士の妹さんもいらっしやるとか」

「そうそう。篝っていうんだけどね。俺の弟分と妹分」

「そして護衛対象……」

「やっぱり学園長から聞いてたか。先輩としていろいろ面倒見えてあげてな？」

「もちろんです。まあしばらくは私も忙しいのですぐに会って」とはななそうですけど」

「おう。じゃあ、そろそろ授業も始まるから行くよ」

「あ、そういえば用務員室で暮らすらしいですね。今度遊びに行きます」

「わかった。待ってるよ」

待ってるとは言ったものはたして生徒を招いてもよかったのだから？

などと考えてるうちに楯無は角を曲がったのかいなくなっていた。

「おっと。俺も行かないとだな」

再び一年一組へと足を進める。

ほっぺを触るとまだ少し痕が残っている感覚があった。

第四話：MK5（マジでキレル五秒前）

キーンコーンカーンコーン。

三時間目開始のチャイムとともに一組へ入ると、すでに千冬姉と山田真耶先生がいた。

ってというか生徒の視線が痛い。なんで用務員がここに？ といった疑問的なものや、いぶかしむ視線が痛い。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について、そこにいる柳先生が説明する」

千冬姉がそう言うと、席に着いた生徒達がにわかに騒がしくなる。

「あの人ってたしか用務員の先生だよね？なんでそんなひとが授業に？」

「男の先生がISについて教えられるの？」

「哲ちゃん。久しぶりだね。元気だったあ？」

「ってというか、若くない？教師に見えないんだけど」

散々な言われようだ。……ってというか本音はもう少し空気を読みなさい。

千冬姉の隣で、その様子を傍観していると金髪ロールのザ・お嬢さま！ という感じの白人の子が勢いよく立ち上がって指を指してきた。

えーと。イギリスの代表候補生でセシリア・オルコットだったかな。これでも一応、代表候補生の顔と名前ぐらいは覚えてきているのだよ。

「だ、男性がISについての講義だなんてどういことですか!？」

おお。今時の女子って感じだなあ。

などとあつげにとられていると千冬姉が話し始めた。

「席に着け。オルコット」

「その男といい！あなたといい！どういっつもりなんですの!？」

「席に着けといっただろう」

ひいっ！！ 背後に鬼が見える！！ 人間のまとうオーラじゃないぜ！

「ハ、ハイッ!！」

さすが織斑千冬！ 代表候補生の小娘なんて一声でいさめちまっ

たぜー！！

ギロリッ

千冬姉の恐ろしさについて考えていたことがばれたのだろう。今度は俺に視線を向ける千冬姉。調子にのってゴメンナサイ。

「さきほど着任式で紹介があつたが、改めて私から紹介させてもらう。柳哲也先生。用務員としての着任だが、一年生の副担任といつかの授業を担当してもらおう」

副担任と講師というのを聞いて教室がまた騒がしくなる。一夏と算は訳がわからないといった感じだ。っていつか一夏キョドリすぎだろ。

千冬姉は目で教壇に来るように示す。

それを受けて教壇に立って黒板に自分の名前を書き、生徒達に顔を向ける。

……一気に静かになった。あー緊張してきたー！

「柳哲也です。さきほど織斑先生が言ったとおり用務員だけでなく、一年生の副担任といつかの授業、特に装備についての授業を受け持ちます。みんなとあまり歳も変わらないので仲良くしてもらえると嬉しいですよ」

「補足だが柳先生は教師としては一年目だが、様々な武装について詳しいからなにも心配することはない」

まさか千冬姉がそこまで認めてくれてたとは思ってなかったから
呆然としてしまう。

「なにか質問か？」

どうやら生徒の一人が手を挙げていたようだ。

「歳があまり変わらないって、柳先生はおいくつですか？成人して
るかどうくらいにしか見えないんですが……」

「十八歳だけど……」

「「十八歳！！！？？？」」

一夏と箒、本音以外の驚いた声が響いた。驚くのも当然だろうな
あ……。

「十八って高三か大学一年ってこと！？」

「いや、中退ってことも……」

「若すぎない！？」

「っていつかその歳で教師！？」

確かに十八歳の若造が教壇にたつてれば驚くだろう。で、中退って言ったの誰だ。あとでゆっくり話し合おうじゃないか。

授業が始められなさそうなので、静かにするように言うべきか考えていると織斑先生が俺の近くきた。手を振り上げたりして、何をしようってんです？

ビュンッ

バンッ！！

「無駄口を叩くな！さきほども言ったとおり授業には影響はない！」

え？何が起きたの？俺の鼻先を高速で手がかすめていて。え？

今、目の前で何が起きたかって、千冬姉が机を叩いて生徒を注意したんだけなんだけど。俺が打たれるのかと思って死を覚悟しましたよ。ええ。

そして再び千冬姉の剣幕で静かになる教室。千冬姉すげえ。

「じゃ、じゃあそろそろ授業を始めても？」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

まだ決まっていなかったのか。このクラスには専用機持ちのオルコットさんがいるからすぐに決まるだろうけど。……心配することはないよ、一夏くん。なにがなんだかわからないって顔してるけど

君にはあまり関係ないだろうからね？

千冬姉の説明が終わると、一人の生徒がさっそく挙手していた。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

は？

「私もそれが良いと思いますー」

俺は良いと思いませんー。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

一夏を担ぎ上げる周りの声に本人が立ち上がる。期待を込めた視線が一夏に集まっていた。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらない」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも」

「待つてください！納得がいきませんわ！そのような選出は認められません！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏が恥さらしかー。それは……笑えるな！一夏がクラス代表なら退屈しなさそうだなあ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

自分を持ち上げすぎじゃない？この人。それにしても極東の猿……日本の男性を敵に回したな！猿だけに猿回しってことか！けど、さすがに見下し過ぎでしょう。頭に血が上ってきたし。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき。そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなく手はいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

「

……一夏、こんな貴族ぶったガキよりお前のほうがクラス代表に
適任だ。だってお前大人っぽいところあるから、こういう奴を相手
にうまく立ち回れそうだし。

そしてこうも思った。

俺はまだ十八のガキなんだなあ。今のセリフには怒髪天で堪忍袋
をつきさしてしまったから。

しかし、カチンときてたのは俺だけではなかったらしい。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で
何年覇者だよ」

一夏がオルコットに言った一言が引き金になったのかどうかはわ
からないけど、俺はさらに追い討ちをかけてやろうと口を開いた。
開いた口を閉じるにはもう手遅れだった。

第五話：反省はしている、後悔はしていない

「いやあ、すごいなあオルコットさんは！　こんな極東の猿が教師をやったり、世界初のIS搭乗者になっっているような、後進的な島国に技術を学びに来るなんて！　でも苦痛を感じるなら、無理をしないでカビ臭い歴史しか誇りが無いような島国に帰って、技術を学んだらいいんじゃないですか？　あ！　そっかー！　侵略みたいなことしか取り柄がない祖国には、教えられるほどの技術もないから、こんな国にきたんですよね？　大変だなあ！！」

……………時が止まった。

と感じるほど教室は静寂に包まれた。

何が起きたのかわからない、といった表情でクラス内にいる人間すべての視線が俺に集まる。

一人の例外を除いては。

「貴様は何をやっているんだ」

パンツ！！

千冬姉に出席簿で頭を思いっきり叩かれた！

や、やばい。やってしまった。けれど口から出てしまった言葉は戻ってこないのだ。

けど勢いに任せて言い返したら気も済んだしなあ。いや、反省はしてるんですよ？　後悔はしてないけど。

「あつ、あつ、あなたたちねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

先に侮辱してきたのはあなたですけどね。

「決闘ですわ！」

決闘？IS同士で戦おうってのか。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

決闘の申し出には俺の代わりに一夏が答えてくれた。いよつ、織斑屋！日本一！それでこそ男だ！こんな奴懲らしめてしまえ！

「柳先生はISを操縦できないのでしょうか？あなたがその人の分まで戦いなさい。言っておきますけど、わざと負けたりしたら二人ともわたくしの小間使い　いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

そうだ！一夏、全力で行け！

「あなたが負けたクラス代表の座だけでなく、あそこまでおっしや
った柳先生には小間使いになってもらいますわ」

ま、まあ？　一夏なら勝てるかもしれないし。ビビってなんかい
ないし！

「俺はそれで問題ない。一夏ならなんとかしてくれるだろうと思っ
てる」

「哲也兄……」

それにあそこまで暴言を吐いたんだ。自分で言った言葉には責任
を持つさ。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

一夏がそう言うところからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

しまった、という顔を一夏がしているが、確かに今みんなが言っていたことに間違いはない。

ISは過去の戦闘機・戦車・戦艦などを遙かに凌ぐ超兵器だ。そしてISは基本女子にしか使えない。腕力は何の役にも立たないという事は、ISの戦闘において、男であるというメリットはない。さつき俺がオルコットさんに抱いた『今の女子』という印象は、そこに関係している。

ISが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてその力を持つのは基本女しかない。だからといってその力を振りかざせば、それはただの暴力だと思う。

一夏も同じことを考えただろう。だからオルコットさんに突っ掛かったのかもしれない。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

ハンデがなくて追い詰められるのがどっちかはまだわからないしな。

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、しらないの？」

「……………」

「大丈夫だぞ、一夏。俺が色々教えてやるよ」

千冬姉がIS関係のことは見せないようにしてたから、一夏はISの戦闘をろくに見たことがないはずだ。ISのことをろくに知らない一夏が勝つには俺の助けがいるだろう。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬姉が話を締める。

なんか色々あったがこうして俺の初授業は始まったのだった。

第六話：男たちの受難

「はあ〜。教師がこんなに疲れるなんて思わなかったな……」

とりあえず今日の仕事は終わりらしい。校務員なら泊まり込みで見回りしたりしなきゃいけないんだろうけど、この学園のセキュリティに俺の入り込むような隙もないだろうしね。あくまで校務員というのは建前で、講義と護衛が仕事ということだろう。

「四時間目と五時間目の授業も大変だったけど明日からは少しは落ち着くんだろうな？」

そう、騒ぎが起きたのは一組だけではなかったのです。

四時間目

「じゃあ授業を始め」「男の先生だ!!」……ます」

「先生はどうしてこの学校に来たんですか!？」

「年下ってありますか?」

「どんなことを教えてくれるんですか!？」

「し、静か　「実技も教えてくれるって本当ですか!？」　にして
ください……………」

「手取り足取りってこと!？」

「授業始めさせて……………」

五時間目

「今度こそ授業を　「中退先生だ!！」　始めさせてくれよ!　コ
ンチクシヨー!……………」

「ロリコンって本当ですか？」

「手取り足取り実技を教えてくださいませんか!？」

「とりあえず、中退とロリコンの噂を広めた奴は後で体育館の裏ま
で来い。お話聞かせてもらおうか!！」

こんな感じで一日目はろくに授業を進められなかったわけ
です。泣きたい。

明日からは俺の話も広がって落ち着くだろうしね。……………落ち着く
よね?　落ち着くといいなあ。っていつか落ち着けよ!!

「まったく、高校生は恐ろしいな……………。ん?」

自分が数ヶ月前まで高校生だったことを棚に上げてそんなことを考えていたら放課後にしては騒がしい一角、一夏のクラスでぐったりしている生徒がいた。

もちろん織斑一夏だ。……ちよつとからかってやるうじやないか。

「織斑！ こんなところで何をしている！！」

「……へ？ す、すいません！！ って哲也兄じゃないか！！」

「ハッハー。驚いたかね織斑くん？」

「驚くに決まつてるだろ！？ ああ、もう！ どうしてこんなところにいるのかとか！ なにしてんだとか！ いろいろ聞きたいことがあったのに、授業が終わったらさっさと出ていっちゃうし……。とりあえず久しぶり、哲也兄」

「おう。久しぶり、一夏。でかく……なったな？」

「なんで疑問形！？」

「ハハッ！ ウソ、ウソ。見た目は男らしくなったじゃん」

「そ、そう？ っていうか見た目は……」

「まあまあ。……っーか、なにISを操縦できるようになったちゃってんだよ。お兄ちゃんはビックリしましたよ！？」

「うーん。俺もよくわからないんだけどさ……」

「夏はあんまり変わってないみたいで安心、安心！」

「っていつか、この女子の数……どうなってんの？」

「さ、さあ？俺が聞きたいくらいだよ」

そして放課後だというのに他学年、他クラスから女子が押しかけ、きゃいきゃいと小声で話していた。

「大人気じゃん」

「……本当にそう思ってる？」

そんな感じで約三年ぶりに会う弟分と話していると、山田先生が教室に入ってきた。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて一夏に部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。IS学園は全寮制で、生徒は寮での生活を義務付けられている。世界中から生徒が集まっていることに加え、将来有望なIS操縦者をあれこれ勧誘しようとする国家などから保護する目的もあるらしい。

けど一夏の部屋つてまだ決まつてなかつたと思うんだけど。どうやら一夏も同じ疑問を持ったようだ。

「事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりのことつて政府から聞いてます?」

山田先生が最後だけ一夏にしか聞かえないように耳打ちをする。まあ日本政府も前例のない『男のIS操縦者』に保護と監視の両方を付けたいだろうし、入寮を急がせたのにも頷ける。

俺は学園独自の判断で一夏の護衛をしてるから日本政府は関係ないけど、その辺りの事情も少しは耳にしている。

「つていうか、山田先生はいつまでその格好でいるんですか?」

一夏の耳元にずっと顔を近づけていたからか、クラス内外の女子がまた興味津々といった感じの顔をしている。うらやま……けしからん!

「あっ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですね……!」

「それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家にかえらないと準備ができないですし、今日はもうかえってもいいですか？」

「じゃあ家まで車で送ってやるよ」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやったありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

着替えと携帯電話だけとか最低限すぎない？

まあ、千冬姉の登場で問題は解決したし、俺も部屋に戻ってゆっくり休むとしよう……

「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか

「？」

「あー……」

「え！？ 一夏は女子と風呂入れるの！？」

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だつ、ダメですよ！！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？ 女の子に興味が無いんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

「山田先生みたいな年上ならいいってことか？」

「わ、私ですか！？ き、き、教師と生徒なんてダメですよ織斑くん……」

「ま、まさか俺と入りたいってこと……？ そんな、ダメだよ一夏。お、俺たちまだそこまで進んでないだろ……？」

「人の話を聞いてくれよ！」

一夏を（山田先生も）からかって遊んでいたら、俺と山田先生の言葉が廊下にいた女子まで伝わったようだ。
薔薇つばい話に花が咲いていた。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……?」

「柳先生と仲が良さそうな理由ってもしかして……」

「中学時代の交遊関係を洗って！　すぐにね！　明後日までには裏付けとって！」

なんとという女子高生の行動力。半端じゃないな。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

「じゃあ俺は会議がないので校務員室に戻りますね」

早く風呂に入って飯つーくろ。あー、疲れた、疲れた。

「あ、柳先生は寮長なので、織斑くんと一緒に寮の場所や施設の確認をお願いします」

やっぱり簡単には休ませてくれませんよねー。

「え？　寮長って初めて聞いたんですけど」

「先ほど学園長から連絡があった。……例の件で動き易いようにとのことだ」

「なるほど。わかりました」

例の件っていうのは一夏の護衛のことだろう。早く休みたかったけど、それならしょうがない。確かに寮長なら寮の中にも怪しまれないだろう。

「ふー……」

千冬姉と山田先生が教室から出ていくのを二人で見送ると、一夏はため息混じりに立ち上がった。

「じゃあ行くか」

「うん。今日はもう疲れたよ……」

「俺も……」

あちこちから騒がしい声が聞こえてくるが、俺と一夏は寮へと足を進めることにした。一夏の部屋まで行けば多少は静かだろう。

第八話：扉を開けるとそこは修羅道でした

「えーと、ここか。1025室だな」

一夏が部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込むと確かめる。

「あれ？ 鍵が開いてる」

「空き部屋だし最初から開いてたんじゃない？」

「そうだね」

ガチャ

一夏に続いて部屋に入ると、大きめのベッドが二つ並んでいるのが目に入った。

「生徒ってこんなに良い部屋で暮らすの！？ そこのホテルよりよっぽど良い部屋じゃないか！」

「なんとというモフ感。これは間違いなく高いベッド&羽毛布団だ」

それは大の男二人がベッドに飛び込んで、はしゃぐという奇妙な光景だった。

「誰かいるのか？」

二人ではしゃいでいると、突然、奥にあるドアから声が聞こえてきた。騒ぎすぎて迷惑だったかな？ 申し訳ございません。

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

って、あれー？ 一夏って一人でこの部屋を使うんじゃないの？ というか男が一人しかいない学園で同室になる人がいるってことは……

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之」

「 箒」

……ですよー。

なんとシャワー室から出てきたのは、成長した妹分でしたとき。脱衣所から出てきた箒は、当然、相手が女子だと思ってそのままの格好で出てきたのだろう、バスタオル一枚を巻いただけの姿だった。しかし部屋に女子しかいなかったとしてもその格好はいかがなものかと思うぞ。

バスタオルはギリギリのところ箒の身体を隠していたが、逆に

なにも着てない状態よりエロい。

「い、いちか……？ て、てつやさん？」

「お、おう……」

「久しぶりー」

「っ……！？ み、見るな！」

「わ、悪い！」

一夏は慌てて顔を横に逸らす。俺はまじまじと箒を見る。顔を真っ赤にした箒が体を隠すようにタオルできつく自分を抱きしめた。……押し上げられて逆に胸の谷間が強調されていた。

「それにしても箒……お前、成長したなあ」

主に胸が。

昔、二人の面倒を見ていた俺は二人まとめて風呂に入れていたことを思い出した。

まさか妹の裸でこんなにドキドキしないなんて自分でもビックリだ。

「あ……あ……」

「て、哲也兄！ バ、バカ！！」

無理矢理に首を捻るな！ 変な音がしたぞ！？

「な、な、なぜ、お前たちが、ここに、いる………？」

油の切れた機械のように、ぎこちない動きで箒が聞いてきた。

「いや、俺もこの部屋なんだけど」

「俺は一夏の付き添いで」

そこからの箒の行動は速かったさ。壁に立て掛けてあった木刀で上段打突をしかけて って甘いつ！

「そいやっ！」

「うおおっ！？」

おれはベッドの上で横に一回転し、箒の背後にまわり攻撃を避けた。

一夏は部屋から出ていったか………。

「間髪だつたな……と思つたら」

そう、今俺は箒の後ろにいる。つまり俺とドアの間には阿修羅
じゃなくて箒がたっていたりする。

「あー……、箒さん？ 見逃してくれたらっていう選択肢はもちろ
ん……？」

ゴスツー！

やっぱりこれが答えですよね……

「知らない天井……なのかなあ？」

気がついたら俺は今日から住み込む部屋で、ベッドの上に寝かさ
れていた。

どうして俺はこんなところにいるのだろう？ 頭痛で意識がはっ
きりしないけど……。

「確か、一夏と寮を見に行ったら部屋のなかに鬼がいたような……」

「そつだ！ 俺はその鬼に襲われたんだ！」

「誰が鬼なんですか？」

「いやー。俺の妹分のことなんだけどね！」

「なるほど……」

「本当、強暴に成長したもんだよ。いきなり襲い掛かってくるなんて」

「へえー。いきなりですか……」

「昔から腕っ節は強かったんだけどねえ……ん？」

顔を横に向けるとそこには話題の人物がいた。

「なるほど。哲也さんの常識では女性の裸を見ても襲われる覚えがないということなんですね……？」

「わたくしめが間違っております。まことに申し訳ございません！」

「まったく。心配して付き添ってたのに……」

「悪かったよ。けど、まさか一夏にルームメイトがいるなんて思わないだろ？」

「確かに」

「どうやら話を聞くとあの後、一夏ともう一悶着あったようだ。「一夏が私の下着を……」とか「変態になってしまった……」だとかつぶやいてたし。一夏よ、なにをやらかしたのだ……。」

「一夏がここまで連れてきたのか？」

「はい」

「明日にでもお礼言っておかないとだな。で、箒は俺が起きるまで見てくれたんだ」

「すこしやり過ぎました……」

「まあ、知り合いに裸見られて頭に血が上ったんだろ？俺も悪かったし、しょうがないさ」

「ところで今何時ぐらいなんだろう？　って消灯時間ギリギリじゃないか！」

「箒。看病してくれてありがとな。けど、そろそろ消灯時間だから

部屋に戻りなさい。」

初日から校則を破らせるわけにいかないし。

「あ、では戻ります」

「そうだ、あまり一夏を叩くなよ？　女の子らしいのにあいつ弱いし」

「っ……………！」

俺がそういうと、篤は顔を赤くして走り去っていった。照れたのかなあ？

「それにしても、長い一日だった……………」

明日から仕事をちゃんと務まるるか、早くも不安になった。

第九話：生徒会長の憂鬱

「……どうしてこんなことに」

目の前には原形を留めていない食材が散乱している。理由は単純で、せつかく夢の一人暮らし（仮）を始めたんだから自炊でも思っただけ朝飯を作ろうとしたら、切る食材がどんどん小さくなってニンジンもピーマンも全部みじん切りにカットされていた。

「結局は食堂を利用することになるのか……」

こんなことなら最初から食堂に行けばよかったな。すべてみじん切りにされた食材を炒める。

「これが朝飯かと思うと泣けてくるね」

「こうして俺の教員生活二日目は自分の料理の下手さを実感する」
とからスタートした。

「……ということなので、この状況下ではビーム兵器よりも実弾の

方が戦況を有利にすることが出来る可能性が高いわけです」

今日は二年生に実弾兵器とビーム兵器の基礎を確認させながら、
実戦での動き方を解説する。

まあ、あくまでデータの上での話だから実際に動いたら違うこと
が起ってしまうこともあるんだろうけど。

「少し早いけど今日はこれでおしまいにします。次は昼休みだから
ちよつどいいだろうしね」

そう言うやいなや、ガヤガヤと騒がしくなった教室で後片付けを
始めると一人の生徒が声をかけてきた。

「哲也さん、一緒にお昼ご飯でもたべませんか？」

もちろん楯無しかいないんだけどね。

「いいよー」

気軽に返事したけど別に生徒とご飯を食べても問題ないよな？
食堂を使う許可は出てるしね。

高校にいた時は教師と昼飯を食いたいなんて考えたこともなかつ
たわ。……楯無とは昔からの付き合いだから教師だと思われる

かどうかも怪しい。

「って、食堂でいいんだよな？」

「もちろんです」

「誘ってくれたもんだから弁当でも作って来てくれたのかと期待したのに……」

「じゃあ今度作ってきましようか？ 愛妻弁当」

「ぶっ！！ いきなりなに言ってるの!？」

「そんな照れなくてもいいじゃないですか。私と哲也さんの関係なんですから」「どんな!？」

「主人と下僕」

「妻関係ねえ！！ しかも下僕かよ!？」

「そうです。哲也さんの下僕である私は、ご主人さまの命令に従わないと辱めをうつけるために無理矢理っ……!！」

「俺が主人かよ!？」

「ご主人さまにならなにをされても……いいんですよ?。」

「言ってることが矛盾してやがる!!!」

そうやって騒いでいると周りから話し声が聞こえてきた。

「哲也先生と更識さんてそんな関係なの……？」

「なんか以前から親しいみたいだし……」

「けど一年生の男の子とも怪しい関係らしいわよ」

「私のお姉様がつ……！」

俺と一夏の噂（嘘）がここまで広まっていた……！
恐るべし女子
高生の情報網……。私のお姉様ってなんなの？

「じゃあ行きましょうか」

「この状況を作ったお前を許さないからな……！」

日替わり定食もおいしそうだけど、ラーメンも捨て難いなあ、けどやっぱり好物の焼きそばにしようか……なんて考えていると楯無が俺の服を引っ張ってきた。

「どうした？」

「哲也さんのことだからメニューを決めるのに時間がかかるだろうと思って、食券買いましたよ」

「おいおい、それが嫌いなものだったらどうするんだよ」

「哲也さん焼きそば好きでしたよね？」

「はい、その通りです」

「ふふ、よかった」

「ほんと、楯無はよく覚えてるよな」

「ええ」

「ありがとな」

ポンと楯無の頭に手を置いて軽く撫でる。すると楯無は顔を赤らめながら、上目遣いで睨んできた。予想とは少し違う反応に少し驚いてしまったんですけど。

「哲也さん、そのクセは治してくださいって前も言いましたよね？」

「そうだったっけ？」

「誰彼かまわずそんなことしてセクハラだとか思われたらどうする

「んですか！」

「む、誰彼かまわずってわけじゃないぞ。楯無と簪と虚と本音、あと一夏と箒に……意外といるな」

「どうです？ 私の言った通りじゃないですか」

「これからは気をつけます」

まさか俺にそんなクセがあったなんて……。この学園は女子ばかりだから楯無が言ったみたいにセクハラだと思われぬように気をつけないと。

注文した焼きそばを受けとって席に着くと、離れた席が騒がしくなっているのに気がついた。あれは一夏と箒と……上級生？

「あ、一夏を見て思い出したんだけどさ、楯無に聞こうと思ってたことがあるんだ」

「なんですか？」

「あいつとイギリスの代表候補生のオルコットがクラス代表の座をかけて決闘することになってさ」

「なんでそんな楽しそうなことになってるんですか」

「まあ売り言葉に買い言葉って感じでしょうがなく……。で、一夏を戦わせるな事になった原因の一部が俺にもあるし、代表候補生だからって天狗になってるひよっ子をギャフンと言わせるために俺

が一肌脱ごうと思うんだけど」

原因の一部もなにも、俺がけしかけたなんて言えない。

「はあ」

「一夏のIS操縦技術なんて素人同然だから、このままじゃ負けるのは目に見えているわけだ」

「起動時間を考えれば当然ですね」

「そう。だからといって専用機が来る前だからISを起動しての訓練も焼石に水だし」

「訓練機とじゃ装備も性能も違いますから」

ISの腕前はISを操縦している時間の長さ按比例していると言っても過言ではない。オルコットは専用機を持つ代表候補生だ、才能だけじゃなく、起動時間も一夏に比べ遥かに長いだろう。

オルコットからしたら一夏の起動時間なんてチリみたいなものだ。しかも一夏が入試で操縦したのは訓練機。オルコットと戦うときは武装もアビリティもわからない、まだ来ていない専用機だ。

「だよな。そこで俺はなにを教えればいいと思う？」

「……は？」

「だから、ISを動かすこともできない迷える子羊になにを教えればいいのかなー? と思ひまして」

「生徒に聞くんですか」

「うっ、まあ、そこらへんは昔からのよしみってことで」

呆れてものが言えないといった感じの楯無を見て、申し訳なく思うが思いつかないものはしょうがない。

楯無は大きなため息をつくとき真剣な表情で考え始める。

「わかりました。そうですね、ビーム兵器とかISに搭載されている武装についての知識と対策でもコーチしてあげるのがいいんじゃないでしょうか」

「なるほど……。たしかオルコットはブルー・ティアーズの操縦士だからビーム兵器の対策を考えるのはいいかもしれないな。授業だけじゃわからないだろうし」

「男の子なら今までISの勉強なんてしてこなかったでしょうし」

「そうだな。さすがIS学園生徒会長!! ありがとう!!」

「いえ。貸しが一つできましたね?」

「お、おう。俺にできることならなんでも言ってくれ」

「ええ、機会があるときに返してもらいます」

「なにするつもりだよ……」

「ふふふふっ。そのときのお楽しみです」

「……」

覚悟しておこう。

「よしっ！ 早速、放課後から特訓開始だ！」

「頑張ってください」

「え……？」

「なにか？」

「いや、素直に応援するなんてなにか裏でもあるの？」

「……」

ドカッ！！

「………すみませんでしたっ！！！」

「もう……。早く食べてください。昼休み終わりますよ」

「はい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9293o/>

IS <インフィニット・ストラトス> ~ School Servant ~

2011年10月13日11時51分発行